

ケ
ー
ス
記
録

四年 木 下 貞

施設名 ○○児童相談所
児童名 K・F 男 満十七才二月
住所 H県K市
通告者 M警察署
種別 家出
家族

続柄	年令	職	業
実父 (死亡)	不明		
実母	42	行商	
異母兄	33	K製鉄会社社員	
実長兄	23		
(最近他家へ養子に行つた)			
実次兄	20	酒屋店員(住込み)	
実姉	18	ゴム会社社員	
実妹	15	ナシ	

A. 取扱つた理由
○駅一時保護所に家出児童が保護されて

いるが、簡単な面接しか、していないため
もつとくわしく面接するようにと云われた
ので面接したものである。既に書き込まれ
ている調査票によると「本児は無断で昭和
32年11月20日、勤めの帰りに三千二百円を
持つて上京し、東京駅構内でM警察署員に
保護されたものである。生活程度は普通、
本児は中卒後F工業株式会社に工員として
勤め月収五千元。本児は以前にも一度家出
の経験がある。
家出の動機は、東京に行けば、会社に勤
めながら野球の選手になれると思ひ、出て
きたものである。尚本人は、家に帰ること
を希望している。」と云うものである。

B. 面接経過
前述のような調査票に目を通し、二階の
部屋にFを呼びに行く。部屋の中では四、
五人の男の子たちが本を読んだり寝ころん
で話をしている。私はどれがFであるか、
わからなかつたので入口で「F君いる？」
といいながら部屋の中を見渡すと皆、お互
いに顔を見合わせながら、自分ではないと
云うような顔をしてこちらを見ている。こ
こは児童の出入りが激しいのでお互いに名
前を知らないらしい。確にこの部屋に
と聞いたのに変だと思つていると一番身体
の小さい子が大声で「Fと云う名前の者、
手をあげろ」と云つたが誰も手をあげな
い。そこへ丁度係の先生がいらしたので
「F君がいないのですが」と云うと「あ
ら、F君？」と云いながら皆の顔を見渡し
「そこにいる子ですよ」と指されたので見
ると、身体は大きいのが、ボサツとした感じ
の子がのつそり立上つた。「君がF君？」
と話しかけると、「ええ、そうです」と元

気なく答える。「どうして、F君と呼んだ時、返事をしなかつたの？」と聞くと「恥しかつた」とポツンと云う。

「寒いから食堂に行つて少し話しまじょうね」と云うと「はい」と答える。二人で階段を下り始めたが、彼の足を見ると素足で、おまけに石の階段なのでいかにも冷そうに思えたので「足、冷くない」と聞くと「別に感じません」と答える。「折角、遊んでいたのに連れ出してごめんさい」と云うと「ぼくは、あの部屋にいても皆のように騒げないし、本だつて雑誌や漫画ばかりで面白くないから、いつも一人で黙つているんです」と淋しそうな顔をする。こんな話をしているうちに食堂に来たので陽の当つている所に並んで腰掛ける。

「ちよつとの間、話をするだけだから堅くならないでもいいのよ」と云うと「はい」と答える。身体は大きいが子供つばい感じがする。「F君、身体は丈夫？」「ええ病気がしたことはありません」「家族は調査票に六人と書いてあるけれど、お母さんは何の行商しているの」「あのう、身近なものです」「身近なものつて何かしら？」

「衣類です」

「ああそうなの」「一番上のお兄さんは？」「H県に養子に行つたんです」「いつ頃行つたの？」「今年です」「次の兄さんは？」「K市の酒屋に住込んでいます」

「お姉さんは？」「ゴム工場に勤めてます」「妹さんは？」「今、中学三年です」「あら、それじゃ、来年卒業ね」「ええ、これは頭がいいから高校に入れてやりたいんだが、勝気で皆から嫌われているし、姉さんも中学で止めたから行かしてもらえないんです」

「そう、そんなに頭がいいんなら行かしてあげたいわね」「ええ」「どう、兄弟仲いい？」「あまりよくないんです。僕は一番皆と合わないんです。兄弟でも皆、性質が違つてます」

「どこの家でも皆それぞれ性質の違つているのが普通でしょう？」「そうだ」と云うようにうなづく。

「ぼくは小さい時、とても身体が小さくて普通に扱われていなかつたんで、ひねくれてしまつたんだ。いつも何か一つの事を考

えるとそれで頭が一杯になつて他のことは何にも頭に入らなくなつてしまふんです。道を歩きながらも、布団に入つてからも、

いつも頭が一杯でよく自転車にぶつかつたり、夜中なんか目が覚めて、今、眠つていたんだらうかと考えちやうんです。東京に来る汽車の中も、ここに来てからも考えごとばかりしているんです」

「どんなことを考えるの？」「ここに来てからは、お母さんのことや家のことです。僕は家出したのはこれで二度目なんです。（何も聞かないのに話出す）

一度目は高校一年の三学期の初めに急に都会がいやになつて、静かな田舎に行きたくなつたんで家出しちやつたんです」

私が先程、調査票を見た時は、確に中卒と書いてあつたがと、不審に思つているとこの先生には、面倒だから中学を卒業しただけだと云つたんだけど、本当は高校一年の二学期の終りまで行つたんです。家が貧しいから中学だけで、やめようと思つたが、先生やお母さんが、是非高校に行くようにすすめてくれたから、行つたんです」

「あら、そうだつたの。何と云う高校？」

「県立Y高校です」

「県立に入れる位だから成績が優秀だったんでしょ？」

「それ程でもないが。小学校から中学校一年までは、ビリの方だったんです。でも中学二年から急に人に負けているのが口惜しかったんで一大決心をして、その晩から猛勉強しました。それで成績が急にあげつて、英語は学年で一番になつたし、二年と三年には学級委員もしたんです」

「偉いわね。きつと、今まで君の本当の能力が発揮されていなかったのね。こんなに急に成績のあがる人珍しいわね。やれば出来るよと云う自信がついたでしょう？」

「ええ」と嬉しそうに答える。

「高校時代も成績よかつたんでしょ？」

「それが、あまり良くなかつたんです。僕、高校に入れたけど学費を家から出して、月二千四百円稼いで月謝と参考書代もらうのが気の毒だったから、新聞配達をして、月二千四百円稼いで月謝と参考書代に使っていたんです。でも新聞配達してると疲れて勉強出来ないんです。朝は四時に起きなくちゃならないし、夕方は学校が終るとそのまま行かなくちゃならないし」

「何軒位まわるの」「百五十軒です」

「そう、それじゃ、疲れてゆつくり勉強する暇がないわね」「ええ」

「高校時代、仲の良い友達あつた？」

「ええ、一人しかいなかったけど、とても仲が良かった。でも今は付合っていないんです」「さつき、静かな田舎つて云つてたけど、どこへ行つたの」

「O県の親戚の家に行つただけど、五日目にお母さんが迎えに来たので帰つて来たんです。それから、学校に行くのがいやになつてすぐやめてしまつた」

「優秀な高校に入つたのにやめて惜しいわね」「初めのうちは、やめなきやよかつたと思つたんですが、この頃は何とも思いません。僕は思い立つたらすぐ実行する質なんです」

「そお、それじゃ、高校をやめてそれからどうしたの」「それから、F工業会社の工場に勤めたんです」

「そこでどんな仕事をしているの」「パイプをハンマーで打つ仕事だけど、相当力があるの、初めはつらかつた」

「職場に友達いる」「いいえ、全然いません」

「それじゃつまらないでしょう」「でも、

僕の性格に合うようなのが一人もいないです」

「月給はいくら位、もらえるの?」「五千円です。その内千円はぼくの小遣いにして、残りは家に入れるんです」

「なかなか偉いのね」「いいえ、そうでもありません」と謙遜する。

「今度はどうして出てきたの」「お母さんがすごい勝気で僕と意見が合わないんだ」

「それで出て来たの」「姉さんや、妹とも、うまくいかないし、何しろ家の中の雰囲気がいやで出てきてしまつたんです。この先生には云わなかつたけどお父さんの前の奥さんの子供でK兄さんと云うのが今一緒に住んでいて、僕達を養つてくれているんです」「そう、そのK兄さんて、いくつ?」

「三十三です」「いつ頃から君の家にいるの」「僕達が小学生の頃からです」

「どこかに勤めているの」「ええK製鉄に勤めています。僕はこの兄さんと一番気が合うし大好きなんです」

「ところで、これからどうしようと思つているの?」「僕は家に帰つて又一生異命働こうと思つているんです。お母さんや、家

の者に黙つて出てきてしまつて心配をかけて済まないと思つているんです。僕はこれ二度も家を出たけど今度は三度目の正直で過去のことを直して新しく出発しようと思つています」

「それは、とても良いことね。家を離れてみて、やつぱり自分の家が一番いいことがわかつたでしょう」「ええ、ここに来て、いろんな人の暖い心に接して、うれしく思つてました。昨日はどこかの女学生が慰問にきて歌を歌つてくれたんです。感激して涙がポロポロでてきて困つちやいました。東京の人は親切で話てもわかつてくれますね」とうれしそうな顔をする。

「あちらに帰つたら、又もとの工場に勤めさせてくれるかしら」

「もう、僕も大分熟練工になつているから、きつと働せてくれると思います。でも、もしだめだつたら、どんな仕事でもいいから真面目に働けるところに勤めたいと思います。そしてもし出来たら、働きのながら英語の通信教育を受けたいんです」

「なかなか立派な心構ね。一生懸命おやりなさいね」
「ええ、頑張ります」

「ずい分長い間、話してしまつたけど疲れたでしょう」

「いいえ、全然疲れません。僕は話す気持になれない時は全然話したくないんだが、今日は話す気になつたんです。こういうように話を聞いてくれたり、相談にのつたりしてくれる人がいるといいんだが」

「だから、あなたもよい友達を見付けてもらなさい。困つた時は一人で考え込まないで話合えば必ず道が開けると思うんだけど」

二人で部屋を出ながら「本当に長い間、話たんで疲れたでしょう。元氣を出して一生懸命やりなさいね」と云うと「はい」と云つて部屋へ帰つて行つた。

所 感

このケースは家出児童のケースであり、警察から身柄送致されてきた際に、一時保護所に於て一応簡単な面接をしているので、大体のことは、わかつているが、更にくわしく事情を知るために面接したものである。

そのために、調査票には家出の動機、家族状況その他について既に書き込まれてい

るので一面では参考になつたが、同じことを二度聞くことになつたりして、クライアント自身もあまり良い気持はしなかつたであらうし、私自身も非常に気をつかつてしまい、かえつて面倒な点もあつた。

この面接からも、わかるように、家出児童の場合は事務的な調査では真実を語りたがらず、嘘を云つたり、隠したりすることが多い。従つて、専門のワーカーによる真の面接が行われなければ、児童自身の問題（家出の動機、心理状態など）を正しく理解することが出来ないのではないかと思ふ。

実習中、面接したケースは家出のケースが主なるものであつたが、すべて一回の面接だけでそのケースは閉じられてしまう。

家を出て来たからには、必ず家出せざるを得なくなつた原因があることを念頭に置き、出来るだけ面接しその児童にとつて最もよい措置がなされなければならぬが、現状では本人が望まなくとも、居住地の児童相談所又は親元に送り還してしまひ、その後はどうなつたか、全然知ることが出来ないものである。これでは児童の眞の幸福は得られないのではないかと思ふ。

本児の家の動機として「東京に行けば野球をしながら、会社に勤められると思ひ家出してきたものである」と書類に書いてあつたが、面接して家出の動機などを聞いてみたが、野球のことについては一言も云わなかつた。私もうっかりして聞くのを忘れてしまつたが、この点は、はつきり聞くべきだつたと思つてゐる。

その他、重要な点を聞き落しているかも知れないが、本児が非常に素直にこちらの

聞くことに対して話してくれたので緊張せずによつたりとした気持で面接することが出来た。しかし私の面接の技術は非常に未熟で調査票に書かれてある事柄を更にくわしく聞いたに過ぎないが、クライアントが本当のことを話してくれたので非常にうれしく思つた。このようなところに面接の価値があるのではなからうか。

面接した結果、本児は非常に感受性が強く神経質で内向的な性格の持主であると云

うことがわかつたが、このような児童はどうしても集団の中に溶け込めず、常に孤独である。そこでこのような児童に対しては、よき相談相手が必要である。又家庭でも皆が話合える雰囲気を作りお互いを理解することが最も重要なことである。これらが行われるならば家出なども、ずつと減るのではないだらうか。

×

×

ケース記録

(家庭訪問)

四年 武

田 輝 子

施設名 ○○病院社会事業部
 患者名 K・N男 満8才
 住所 C区M町
 家族

続柄	年齢	職	業
実父	49	印刷所経営	

実母	22	42	印刷所住込(他家)
異母兄	14		中学3年
兄	11		中1年
姉	8		小3年
患者			

社会事業部のケースとなつた理由

患者K・Nは31・4・18小児科Y先生より神経科診察依頼の為当部に紹介された。神経科の診断は精神薄弱であるが一方家族関係の調整を必要と認める当部のケースとして取扱いを開始したものである。

住居状態

家は階下が印刷の仕事場に使用され2階に二間あるが一間は活字拾いの部屋として用い、住居としては2階6畳だけであり、この部屋は薄暗く採光不良。最近3階に3畳一間を増設し勉強部屋として使用している。

経済状態

経済的にはさし当つて問題はない。父親は使用人3人を使つて印刷所を経営。

訪問目的

患者K・Nは乱暴な行為が烈しく母親の手に負えない精薄の子であり、相談当初3ヶ月間通院していたが、その後中断しているケースである。最近Kの教師より母親に注意され母親自身何処か適当な施設にでも相談に訪れた。最初に診断を受けた精神科医がやめられて連絡が出来ないので、新しい医師からもう一度診察を受けて精密な知能検査等を受けさせてその結果特殊学級に入れるなり、施設に入れるなどを考えるように相談して来て欲しいと言われて訪問する。

訪問経過

社会事業部からの訪問を告げるで使用人が2階へ呼びに行つてくれたが、すぐ母

親が飛び下りて来た。「昨日も来てくださったそうので留守にして申訳ありません」と訪問を大変恐縮した様子をしきりとする。

印刷機の音が騒がしい中で、2階の上り口の所に座布団を置き「2階に今迄寝てたもんで散らかしていますのでここでかんべんして下さい」と困つた様な顔をするので、「こちらで結構でございます」と笑い返した。「その後Kちゃん如何でいらつしやいますか」とたずねると、「相変らずで良くなつたところは一つもありません。もう家じや手に負えません」と如何にも困り切つた又捨鉢な様子がかがられる。

「偏食もまだ我儘おつしやいますか」と問いかけると、身体をのり出して「そんなんですよ。相変らず魚、野菜は全然食べず、私としては何とか食べさせようとすると、怒つて暴力で辺りの品物を投げたりするんですよ。栄養の摂れるもの食べないんですから……。何だか顔色が悪くつてね」という。「お家ですと何といつても我儘が通るからじやないですか」とここまで言うとう「そんなんですね。やはり可愛想なもので好きなものを与える事がありませんね。でも最近では一日20円のお小使をためて好きな

ものを買食する事を覚えましてね。本当に困ります」と息もつかずに話したあと私の顔をシゲシゲと眺める。

この辺で知能検査の事を話そうと決心し、「先日精神科の先生ともいろいろ御相談致しましたが、もう一度精密な知能検査をお受けになつてその結果Kちゃんの事考えて特殊学級なり施設にお入れになつた方がいいのではないかと、この事ですので御相談にお伺いしたのですけれど」と話し出すと、母親はちよつと真剣に考え込んだ様子をして顔を強張らせたが、直ぐ「Kの前の受持の先生はもつと出来ない子がいるから大丈夫ですよと言つて慰さめてくれたんですが、今度新しい先生がみえたんですよ。その先生つたらKはどうにも手がつけられないから母親がもつと指導してくれなくつちや……。と私が注意されちやつて……。とケラケラ笑う。と又深刻な顔になり「そう言われたもんで私も時々学校について行つたんですがKが「母ちゃんがついて来るならもう学校に行かない」と叫んで暴れるもんで、最近では行かないんですが全くどうしていいの……。施設に入れるつたつてこの辺はやはり世間がうるさくてね。私だ

つてやつぱり世間体が恥かしいもんでね」と完全にしぶつてしまつた。「そうですね。やはり世間の事お考えになるかも知れませんが、Kちゃんやんの本本当に考えるなら適当な方法を出来る丈早く考えてあげなければならぬと思ひますが、一度見学という意味で施設を訪問なさつたら如何ですか。その子に應じた指導をして下さいまし、仲々と生活しておりますよ」と自然に話すと「へえ、そうですね。何だか私しや施設と聞いただけでみじめなものを想像しちやうんですがね」と疑つた顔をする。「Kちゃん飛び抜けて低いお子様じやありませんから施設にでも入つたら自信も起るでしょうし。何しろ楽しく勉強出来なければ意味ありませんものね。知能の程度で組も分れていますし」とここまで話すと、「まあ私は皆ゴチャゴチャ勉強するのかと思つてました」と感心している。「お母さんがお考えになる程近所の方達も変な眼で見ないと思つてますよ。そんな事気にしないでKちゃんやんの将来を長い目で見てみてあげたら如何でしょうか」と話すと「そうですね」と躊躇つたが、「では近いうちに病院へまいりますからよろしく願ひします」

とあつさり同意してくれた。「だけどあの子病院をとでも嫌つてますけど、引つ張つて連れて行きます」と、如何にも張切つた様子なので、「あまり無理にでなく機嫌の良い日にでも出来るだけ強制的にでなく連れていらした方がよいと思ひますが」と問いかけると、「そんな時あるかな?。何か買物にでも連れて行つて」と黙つてしまつたので「お買物に連れてらして病院の前でも通つた時ちよつと寄るといふ具合にしたらどうでしょうか」「そうしてみます」と笑つていた。

「最近私も具合が悪くて毎日T大学病院に通つてゐるもんで」「それはいけませんね。お疲れじやないですか」と尋ねると、「結局はそうなんです。身体の節々が痛くてやり切れません。だからKの事なんて考へてる暇がないんです。私も大部良い

し。そうですね。出来る丈早く相談に伺います。そちらの御都合は大体いつがよいでしょうか」と積極的な態度に変つて来た。

「そうですね。御相談はいつでもかまいませんが知能検査の方は精神科とも打合せをしなければなりませんので」と考え込むと「じや私の方から出掛ける前に電話をしますよ」「そう願ひ出来たらいらしてもお待ちしております。どうぞお大事に」と帰り仕度をはじめると、「本当にこんな騒々しいところで申訳ありません。必ずまゐりますからI先生によろしくお伝え下さい」と何度も繰返すのでそれを約し、「どうぞお大事に」ともう一度挨拶して帰路につく。

掲載のケース記録について

松本武子

ここに掲載のケース記録は、学生が実習

に出る際に、宿題として課し、大学に戻つ

で後提出させたものである。本年は児童と医療の二分野に実習せる学生の中より選んで掲載した。

記録のとり方は種々ある。掲載の如き記録はアメリカで学生が実習に出て先づ書かせるられる記録である。面接中の応答をありのままに書くことによつて、学生は自分の面接の態度技術を客観的に検討する機会をもち、スーパーヴァイザーはこの様な記録を通して学生が一人前のワーカーとして如何様な面接をしたかを知ることが出来る。テープレコードにとれば悉く言葉が記録されるから指導するには最もよいではないかといわれるかも知れないが、それはそうではない。ケースワーカーが自分の手で書いた記録にはテープレコードにないクライエントの態度感情、それに応答するケースワーカーの態度感情が描出され、亦必然的にケースワーカーが重要だと思つている点が浮上つてくる。

かかる記録を前において、スーパーヴァイザーと学生ワーカーが互いに論じ合い疑問を訊し、個人指導をうけるのがアメリカの大学生が実習先でうける教育である。ケースワークの技術、過程についての訓練、

汎くケースワークの原理、ワーカーの態度についての了解も、こうして実際の体験した材料により、学ぶ者の考を引出しながら教えていくことによつて始めて適切な教育効果があるものと思われるのである。この様な叙述式記録は教室の教材として用いられるのみならず、施設に於ける指導管理のため、ワーカー自身がケース内容を保持し、変化していくクライエントの情況と感情、そしてケースワーカーとの相互関係の変化を迎える材料として記録され保存されるものである。

サンマリーは叙述式記録と全く異なる記録形式であるが、サンマリーもその特定の意義、形式によつてゴールドン・ハミルトンは九種類をあげて説明している。然し、前述の様なケースワークの技術的訓練の為にサンマリー式の記録は適さない。サンマリーはまた別にサンマリーの書き方として教えられなければならない。現在日本で各施設で書かれて居り、また学生が書かせられていたものをみると、サンマリー式のものが多いようである。そこで私は毎年技術的訓練のためにありのままの面接記録を学生に書いてもらつて教材とする。

従つて掲載する面接記録はその内容が正直に素直に記録されて居り、たまたま教材として適切なものを選抜するのであつて、特にその学生の実習先での仕事がよくつたとか、そのケースが特に成功したケースであつたとかの理由ではない。寧ろ教材として批判を加える場合にはあまり熟練したケースワーカーの記録でない方がよいといふこともいえよう。この記録をよむことによつて、学生が他の分野に於けるケースワークの内容を知ることが出来るためにも、こうした叙述式ケース記録を掲載する意味はあるのである。

以上、ケース記録を掲載する意味について一言付け加えた次第である。

